

(シンポジウム紹介)

感染症は人類の健康に対する最大の脅威である。19世紀末から20世紀にかけて、病原細菌の発見や抗生物質・ワクチンの開発により、人類は感染症を克服できるという楽観論が支配した。併し、21世においてもAIDSやSARS, BSEなど新興感染症に対し十分な対策が取れているとは言いがたい。また、古くから存在する結核やマラリアは抗菌薬の広範な使用によって薬剤耐性を獲得し、先進国ではMRSAや多剤耐性緑膿菌のような弱毒菌による院内感染も大きな問題となっている。さらに、現代社会における活発な人的交流と物流の増大は2009年のブタ由来新型インフルエンザ、昨年の口蹄疫のように、短期間でパンデミックによる大きな人的・経済的被害を生じる。

衛生環境の整備された我が国においても、本年3月の東北大震災という未曾有の大災害の後には、避難所における肺炎やインフルエンザ、ノロウイルスやロタウイルスによる消化管感染症が広がり、感染症のコントロールは社会的基盤の形成に必須である。

本学は医学部、歯学部、松戸歯学部、生物資源科学部、薬学部という医療系五学部を有し、さらに理工系・人文科学系で感染症とその社会的背景をテーマとする研究者も多い。昨年度に続き、新興感染症と再興感染症をキーワードとし、全学的な取り組みを提案したい。特に今年度はワクチンによる感染制御をメインテーマとし I) ワクチンの基礎的研究 II) 医科領域・歯科領域・獣医学領域における臨床効果とその限界、副反応 III) ワクチンの安定供給と経済効果 IV) 地球規模でみたワクチンによる感染制御 の 4セクションを設け、日本大学の研究者を中心とし、さらに学外研究者や外国人の研究者を招聘して情報交換と問題提起、そして解決の糸口を探る。特に昨今問題となっている病原性大腸菌 0111 を含めた人獣共通感染症について第一線の臨床現場で活躍する医師・歯科医師・獣医師に発表と討論の場を設けて、感染症研究・感染免疫学研究の共同研究など人事交流の促進を図る。さらに、特にアジアを中心とした外国人研究者を招聘し、また世界に通用する若手研究者育成のため、英語による発表を原則とする。(応募状況により日本語セッションとインターナショナルセッションとする)